

妊娠・出産・中絶の価値観について

鈴木 美結

(上松 幸一ゼミ)

問題と目的

今日まで妊娠・出産に関する状況は時代とともに変化してきた。最近では、透明なゆりかご（沖田×華、2015）、セブンティウイザン（タイム涼介、2016）などの妊娠出産に関する作品がテレビドラマ化され、また妊娠から出産までのドキュメンタリーも放送されている。書籍では、コウノトリ（鈴木ユウ、2012）、朝起きたら妻になって妊娠していた俺のレポート（車谷、2020）、たまごクラブ（柏原、2020年）・ひよこクラブ（小山田、2020年）などがある。特にたまごクラブ・ひよこクラブでは、妊娠・出産に必要な情報とは別に「パパになるための準備本」を別冊で付属するなど、夫婦二人で妊娠・出産・育児について学べる仕様になっている。また、妊娠から出産までの過程や妊娠の周期によって胎児の大きさがわかる実物大の写真も付録として付いており、男性としても妊娠中についてイメージがしやすくなっている。そのような中、未成

年者の妊娠や出産・中絶が社会問題になっている。

未成年者の妊娠・出産について厚生労働省（2017）のデータをみると、全国で94万6065人が出産をしており、そのうち未成年者の出産は9898人だった。内訳をみると14歳未満が37人で15歳から19歳が9861人出産していた（表1）。一方で厚生労働省（2017）の人工妊娠中絶件数及び実施率をみてみると、16万4621件の妊娠人工中絶があり、未成年者の人工妊娠中絶を実施件数（表2）は、1万128件だった。年齢の内訳は、15歳未満が218件、15歳が518件、16歳が1421件、17歳が2335件、18歳が3523件、19歳が6113件に上った。

未成年者の中絶は、わが国においては親の同意がなければ行えない。このことから、わが国での未成年者の中絶は、“親の監護下にいる児童の問題”として位置づけられる。しかしアメリカでは、1990年にアメリカ心理学会が青少年は大人と同じように成熟しているとし、親の関与なしに中絶を求める青少年の権利を主張している（steinbergら、

表1 母の年齢（5歳階級）・出生順位別にみた出生数

(1) 母の年齢（5歳階級）別

(単位：人)

母の年齢	昭和60年	平成7年	12年	17年	22年	27年	28年	29年	(29年-28年) 対前年増減
総数 ¹⁾	1 431 577	1 187 064	1 190 547	1 062 530	1 071 304	1 005 677	976 978	946 065	△ 30 913
14歳以下	23	37	43	42	51	39	46	37	△ 9
15～19	17 854	16 075	19 729	16 531	13 495	11 890	11 049	9 861	△ 1 188
20～24	247 341	193 514	161 361	128 135	110 956	84 461	82 169	79 264	△ 2 905
25～29	682 885	492 714	470 833	339 328	306 910	262 256	250 639	240 933	△ 9 706
30～34	381 466	371 773	396 901	404 700	384 385	364 870	354 911	345 419	△ 9 492
35～39	93 501	100 053	126 409	153 440	220 101	228 293	223 287	216 938	△ 6 349
40～44	8 224	12 472	14 848	19 750	34 609	52 558	53 474	52 101	△ 1 373
45～49	244	414	396	564	773	1 256	1 350	1 450	100
50歳以上	1	-	6	34	19	52	51	62	11

注：1) 総数には母の年齢不詳を含む。

表2 人工妊娠中絶件数及び実施率の年次推移

(単位：件)	各年度						対前年度	
	平成25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	増減数	増減率 (%)	
	(2013)	('14)	('15)	('16)	('17)			
総数	186 253	181 905	176 388	168 015	164 621	△ 3 394	△ 2.0	
20歳未満	19 359	17 854	16 113	14 666	14 128	△ 538	△ 3.7	
15歳未満	318	303	270	220	218	△ 2	△ 0.9	
15歳	1 005	786	633	619	518	△ 101	△ 16.3	
16歳	2 648	2 183	1 845	1 452	1 421	△ 31	△ 2.1	
17歳	3 817	3 283	2 884	2 517	2 335	△ 182	△ 7.2	
18歳	4 807	4 679	4 181	3 747	3 523	△ 224	△ 6.0	
19歳	6 764	6 620	6 300	6 111	6 113	2	0.0	
20～24歳	40 268	39 851	39 430	38 561	39 270	709	1.8	
25～29歳	37 999	36 594	35 429	33 050	32 222	△ 828	△ 2.5	
30～34歳	36 757	36 621	35 884	34 256	33 082	△ 1 174	△ 3.4	
35～39歳	34 115	33 111	31 765	30 307	29 641	△ 666	△ 2.2	
40～44歳	16 477	16 558	16 368	15 782	14 876	△ 906	△ 5.7	
45～49歳	1 237	1 281	1 340	1 352	1 363	11	0.8	
50歳以上	22	17	18	14	11	△ 3	△ 21.4	
不詳	19	18	41	27	28	1	3.7	

2009)。他にも、アメリカの13の州で制定された中絶法では、「中絶は、母親の命を守るだけでなく、母親の心身を守り、強姦や近親相姦によって妊娠した子孫の誕生を回避するため」としている(Herruet & Ruth, 1972)。また、中絶手術後に避妊具やピルを配布・処方をしており、中絶前後のカウンセリングは特に力を入れている(山本・大河内ら、2002)。これらのことから、アメリカでは未成年であっても中絶を自身の問題として位置付けるという意識の高まりがある。その点、日本の未成年妊娠者の中絶に対する意識は、まだ成熟していないと思われる。

また最近では、新型コロナウイルス拡大による緊急事態宣言により、2020年2月下旬から5月下旬まで政府から国民に対して自宅待機が要請された。緊急事態宣言下の2月下旬から5月下旬までの3ヶ月で中高生による妊娠の相談が急増した。朝日新聞デジタルの記事(2020)によると、親が育てられない子どもを匿名で預かる「このとりのゆりかご(赤ちゃんポスト)」を運営する慈恵病院の妊娠相談窓口に対し、今年4月までの相談件数は、592件にのぼった。

内訳をみると相談件数の592件のうち中高生と判明したのは75件で、全体の約13%であった。相談内容として「妊娠検査薬で陽性反応が出た」

「彼女の生理が遅れている」といった内容のほか、中絶手術についての問い合わせもあった。また、青少年を対象に性に関する正しい知識の普及に取り組むNPO法人「ピルコン」では、東京における3月～4月の10代からの相談件数が休校前の月の2.7倍となった。また熊本市の慈恵病院では、中高生からの相談件数が4月において過去最多となっている(朝日新聞デジタル、2020)。このような相談の件数が増えた原因として、休校期間に交際相手と過ごす時間が増えたことが一因とみられている。また、相談内容から正しい避妊の仕方、妊娠の仕組みを理解していないことが示唆されている。そのような中、相談者の中で正しい避妊行動をしていた者は10代で34%(NPO法人ピッコラーレ、土屋麻由美、2020)であった。増田・今村(2005)は、「現代の若者は、性に関して氾濫する情報のなかでの生活や、性商品化の中にどっぷり浸かっており、正しい性の知識やモラルの欠如、人間関係や絆の希薄さからくる心の貧困さに起因する」と指摘している。この問題の他にも、最近の若者の間で人気のある番組で、現役高校生が出演する恋愛リアリティ番組「今日好きになりました。」(ABEMA)に出演していたカップルが話題となった。番組内で『中高生の憧れのカップル』として注目されている「しゅんまや」こと前

田俊と重川茉弥が、今年4月に妊娠と婚約の報告をしたことで世間で大きな話題となった。当時18歳と16歳だった“しゅんまや”の二人の言動により、中高生が同調した行動をとるのではないかと懸念の声があがっているが、一方で若くして子育てすることのリアルさを伝えられるのではないかと期待の声もあり、賛否が分かれている状況と言える（エンタMEGA、2020）。

現代の日本の性教育について文部科学省(1999)は、「学校における性教育の考え方・進め方」を発行しているが、近年価値観の多様化に伴い、学校でも多様な性教育を展開するようになってきた。しかし一部の性教育に関して保護者からは、「過激な性教育」と称され問題視されていることもある（石川・森脇、2011）。またフランスでは、満3歳から性に関する教育が始まり、幼児や児童が性犯罪から自衛するための方法、そして生殖に関する知識や性同意の重要性や権利などが幅広く行われている（高崎、2019）。またアメリカの性教育には、青少年の望まない妊娠や、性感染症の予防の考え方を反映した、節制教育と包括教育の二つの考え方がある（石川・森脇、2011）。

日本の小学校において、性教育は、性に関する基本的な考えを醸成する教育として位置づけられている。中学校では、性感染症の予防として避妊具の使用が有効であることが触れられているが、避妊具の正しい使用方法などは指導外になっている。高校においては、集団教育の中で総論を学び、具体的な指導は必要時に個別に対応することとなっている。しかしながら、実際のところ個別に性教育が行われているかは非常に不透明な状況である。

このような教育に対し、斎藤（2018）は「性行動を開始する高校生に対して、避妊や性感染症など、具体的な性行動がもたらす問題について講演することが必須である。」と指摘している。また菊池（2011）は、「性に関する基本的な情報を伝えることができる機会は高校までであり、社会に出れば正しい情報を得る機会が少なくなる。」と指摘している。そして、「性に関してタブー視することで汚らしいもの、恥ずべきこととして捉えられ、心身の健康のために知っておかなければいけないことも理解できず、曖昧なままで性行為に至ったり、また誤った情報に振り回されること

につながる。」とも指摘している。安達（2019）は、「日本の学校での性教育と現場の状況の間には大きなズレがあり、自身が責任ある選択と実行ができるように、行政と学校現場が一体となって推進し、有効な性教育を実践していくことが課題だ」と述べている。

以上のことから、今日の我が国における性教育や妊娠・出産に関する認識は、社会情勢に影響を受けている。また今日の学校における男女別の性教育の状況を考えてと男性と女性とでは、妊娠・出産の性に関する意識的価値観に違いがあることが推測される。そこで本研究では、男性と女性との間に妊娠・出産などの性に関する価値観にどのような違いがあるのか調査することを目的とする。

方法

調査対象者：17歳から27歳までの高校生・大学生、および成人の計13名（男性：8名、女性5名、平均年齢：21.0歳、SD3.15）が本実験に参加した。

調査方法：高校生・大学生、および成人を対象に、30分程度の時間で個別にインタビューを行い、用意された質問に対して個人が思うことを自由回答してもらった。

分析方法：調査の際のインタビュー内容は録音し、逐語録に起こした。またデータは匿名化処理を行った後、User Local社のA Iテキストマイニングを用いて内容分析を行い、分析結果をもとに男性と女性の間を意識的価値観の違いがあるかを検討した。

倫理的配慮：調査を行う前に調査対象者に、①インタビュー内容は録音され、本研究にのみ活用されること、②調査対象者の匿名性が担保されること、③本研究の目的は、卒業論文の作成であること、④場合によっては執筆された卒業論文をもとに大学紀要や学会論文として加筆修正され、公表される可能性があることについて説明し、最終的な同意が得られたことを確認した上で調査を行った。同意は書面で確認された。

結果

1. 未成年者の妊娠・出産の意識について

(男性の場合)

1) ワードクラウド、単語頻出頻度

「未成年者の妊娠・出産」について男性と女性の違いについて検討した。その際に単語の頻出頻度は、スコア1.0以上のものを重要なキーワードとして取り上げた。また、二次元マップでは、男女の違いについて検討するため表3にまとめた。男性の場合、名詞では、「不安の種」、「未成年者」、「妊娠」、「若年」、「危機管理」の5つの単語が挙げられた。特徴として「不安の種」のスコアが顕著で、「不安の種」の周辺の単語では、「リスク」「倫理」「収入」「未成年者」「若年」「危機管理」「責任」といった、妊娠が発覚したときの状況に関することに言及したものが多かった(図1、2)。

2) 二次元マップ

「未成年者の妊娠・出産についてどう思うか」について被験者の反応を図3に示す。まず、中央上部の塊であるが、高校生、未成年が妊娠することに関しての社会的認識(増加傾向にあるように感じている)と出産した後で育てるときの負担が大きいことがわかる。これを精神的因子と命名した。第二に左側の塊であるが、学生の周りを見ると「自信」「意思」「欲」「取れる(責任を)」「貴重」の単語があり、学生として貴重な学生生活を過ごしたい意思と自身の欲を満たしたい、もしくは好奇心を満たしたい意思と葛藤

していることが理解することができる。これを自己実現因子と命名した。第三として右側の偏りは、妊娠するまでの行動に対しての「危機管理」に関することで、妊娠から出産後にかかる費用や身体的心理的負担や経済(収入)をどこまで考えているかがわかる。これを行動因子と命名した。第四は中央下部の偏りである。これは、行為を行ったあとにもし妊娠したことがわかったときに自分の環境の変化に影響しそうな単語がままとまっている。もし妊娠してしまっても出産するのであれば高校生活を代償として子育てを行わなければならない、未成年で産んだことによる世間から好奇の目(偏見)で見られる可能性がある。これらの環境に対する不安であることがわかることからこれを環境因子と命名した(表3)。

2. 未成年者の妊娠・出産の意識について

(女性の場合)

1) ワードクラウド、単語頻出頻度

女性の場合、名詞では、「軽はずみ」、「世間体」、「性行為」の三つのスコアが高かった。中でも「軽はずみ」の単語のスコアは2.44と他の単語のスコアより顕著に高かった。

また上記の三つの単語の周辺を見てみると「責任」、「自己責任」、「経済的」、「責任感」、「向き合う」といった単語が付随している(図4、5)。

2) 二次元マップ

男性と同じように「未成年者の妊娠・出産についてどう思うか」について被験者の反応を図6で

表3 二次元マップからみた妊娠・出産について

	精神的因子	高校生、未成年が妊娠することに関しての社会的認識。
男性	自己実現因子	学生として貴重な学生生活を過ごしたい意思と自信の欲を満たしたい、もしくは好奇心から欲を満たしたい意思との葛藤。
	行動因子	妊娠するまでの行動に対しての「危機管理」に関することで妊娠から出産後にかかる費用や身体的心理的負担。
	環境因子	未成年で産んだことによる世間から好奇の目(偏見)で見られることに対する不安。
	行動因子	妊娠することもしくは妊娠する前の行為に対して否定的。
	環境因子	「妊娠」に対して自分個人だけの問題ではないこともあり、より物事を慎重に判断する傾向にある。
女性	印象因子	妊娠することに対して否定的であり、自分が置かれている環境や自身の行動によって責任や覚悟が伴ってくることを認識し自覚している。
	生命因子	妊娠について言及している因子である。未成年者が命を授かることに対して軽く考えていると捉えている印象がある。
	性的因子	性行為について責任を持って行為を行うという認識が低く、妊娠が発覚したときにゆっくりと自覚し、現状と一致するまで時間がかかる。

妊娠・出産・中絶の価値観について

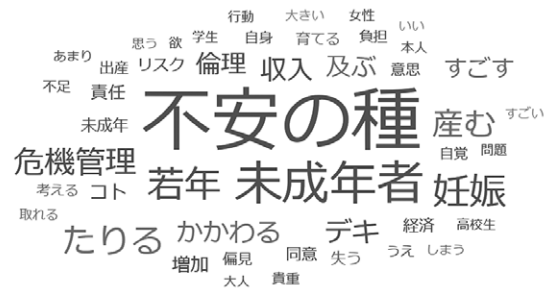


図1 妊娠・出産について (男)

■ 名詞	スコア	出現頻度	■ 動詞	スコア	出現頻度
妊娠	1.48	5	考える	0.03	3
収入	0.59	2	産む	0.38	2
責任	0.21	2	たりのる	0.45	1
問題	0.03	2	かかわる	0.21	1
不安の種	4.14	1	及ぶ	0.20	1
未成年者	2.30	1	すぎず	0.17	1
若年	1.45	1	失う	0.05	1
危機管理	1.01	1	育てる	0.04	1
デキ	0.68	1	取れる	0.01	1
倫理	0.57	1	しまう	0.00	1
増加	0.26	1	思う	0.00	1
コト	0.26	1	---	---	---
経済	0.15	1	---	---	---
未成年	0.14	1	---	---	---
同意	0.14	1	---	---	---

図2 単語頻出頻度 (男)

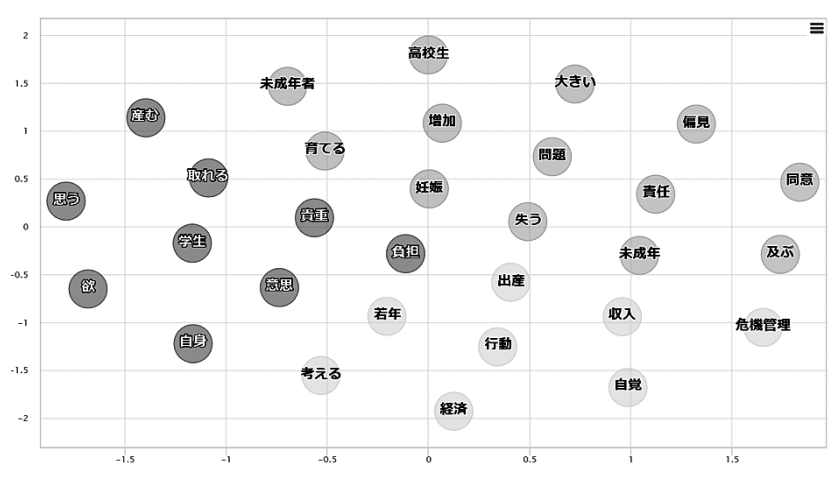


図3 二次元マップ (男)

見ると、下記のような結果になった。まず、中央上部の塊であるが「軽はずみ」、「責任」、「左右」などの単語がまとまっており、妊娠することもしくは妊娠する前の行為（＝性行為）に対して否定的な言葉が見受けられる。また「親」という単語があることについて、家庭環境によっては妊娠・出産に対しての認識に影響を与えている可能性があることがわかる。これを行動因子と名付けた。第二に右側の塊は、「経済」や「状況」、「慎重」の単語がある。「妊娠」という出来事に対してすぐに「産む」「産まない」を決めにくく、自分個人だけの問題ではないこともあり、より物事を慎重に判断する傾向にある。これを環境因子と名付けた。第三に右下の塊は、妊娠することに対して否定的であり、生命因子と環境因子の間に点在していることから自分が置かれている環境や自身の行動によって責任や覚悟が伴ってくることを認識し、自覚していることが読み取れる。これを印象因子と名付けた。第四に左下の塊についてである。「命」や「軽い」といった単語があり、妊娠について言及している因子である。未成年者が命を授かることに対して軽く考えていると捉えている印象がある。これを生命因子と名付けた。最後に第五の右上の塊についてである。性行為について言及しており、「責任感」と「追いつく」の単語が離れている。性行為について責任を持って行為を行うという認識が低く、妊娠が発覚したときに自覚するまたは、妊娠特有の症状が現れたときなどゆっくりと自覚していく。そのため自分の気持ちと自身の現状が一致するまで時間がかかることが読み取れる。これを性的因子と名付けた（表3）。

3. 中絶について（男性の場合）

1) ワードクラウド

一番反応数が高いのは「中絶」であり、これは、質問で「中絶をすることに対してどう思うか」についての趣旨に対するものなのでスコア必然的に高くなる。そのため、この結果では、中絶のスコアについての言及は除外する。中絶の次に「粗末」「命」といった単語があった。中絶することに対して命を軽んじている認識をしている傾向が高く、中絶に対して否定的であるに事がわかる。上記の2つの単語の周りを見ると「エゴ」や「放棄」

「思い込み」といった単語がある（図7）。

2) 共起因子

共起因子をみると一番大きなグループでは、「大人」「優先」「勝手」「判断」「子供」「エゴ」「思い込み」の七つの単語が集まった因子で、“当事者に対する嫌悪感”に関するカテゴリーと考えられる。

他にも「命⇔粗末」、「子供⇔殺す」のグループは、「命の軽視」に関するカテゴリーと考えられる。線画の太さを見ると、「勝手」の単語が一番多く太線で結ばれている。また、「価値観」の単語があるグループでは、「男女」や「考え」といった単語があることから、“男女の価値観の差”に関するカテゴリーと考えることができるだろう（図8）。

4. 中絶について（女性の場合）

1) ワードクラウド・単語頻出頻度

女性の場合も男性と同様質問で「中絶をすることに対してどう思うか」についての趣旨に対するものなのでスコア必然的に高くなっている。次に高いのは、「精神的負担」と「性犯罪」である。この単語の近くを見ると「レイプ」「粗末」「責める」があり、中絶の他に性犯罪に関する反応も見られた。また、「産む」が142とスコアが高く、「中絶」と「出産」と相反する言葉が高い（図9、10）。

2) 共起因子

「家庭」の単語があるグループでは、経済や困難などの単語もあることから中絶する理由として経済的に不安があって育てられない、もしくは育てられる環境にないことなど、何かしら不安要素があることがわかる。中絶を選択するのも一つの方法と認識してされており、“中絶の肯定的側面”に関するカテゴリーと考えられる。また、似たグループで「性犯罪」の単語があるグループでは、中絶を選択する理由としてレイプにあったなど性犯罪に巻き込まれた場合が考えられる。そのため妊娠した女性に対して責任を持つということは酷であり、そういったことを加味すると中絶を選択することを、ただ否定的に捉えているわけではない。よってこのグループは“性被害への対応”に関するカテゴリーとして扱うことができる（図11）。

妊娠・出産・中絶の価値観について

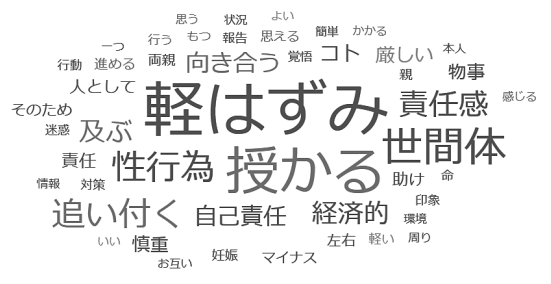


図4 妊娠・出産について (女)

■ 名詞	スコア	出現頻度	■ 動詞	スコア	出現頻度
責任	0.21	2	行う	0.02	2
親	0.06	2	思う	0.00	2
軽はずみ	2.44	1	授かる	0.71	1
世間体	1.36	1	追いつく	0.32	1
性行為	1.00	1	及ぶ	0.20	1
責任感	0.76	1	向き合う	0.15	1
経済的	0.53	1	進める	0.03	1
自己責任	0.35	1	思える	0.02	1
コト	0.26	1	もつ	0.01	1
物事	0.23	1	かかる	0.01	1
慎重	0.22	1	感じる	0.01	1
人として	0.17	1	---	---	---
助け	0.15	1	---	---	---
そのため	0.12	1	---	---	---
左右	0.10	1	---	---	---

■ 形容詞	スコア	出現頻度	■ 感動詞	スコア	出現頻度
厳しい	0.09	2	---	---	---
軽い	0.02	1	---	---	---
よい	0.00	1	---	---	---
いい	0.00	1	---	---	---
---	---	---	---	---	---
---	---	---	---	---	---
---	---	---	---	---	---
---	---	---	---	---	---

図5 単語頻出頻度 (女)

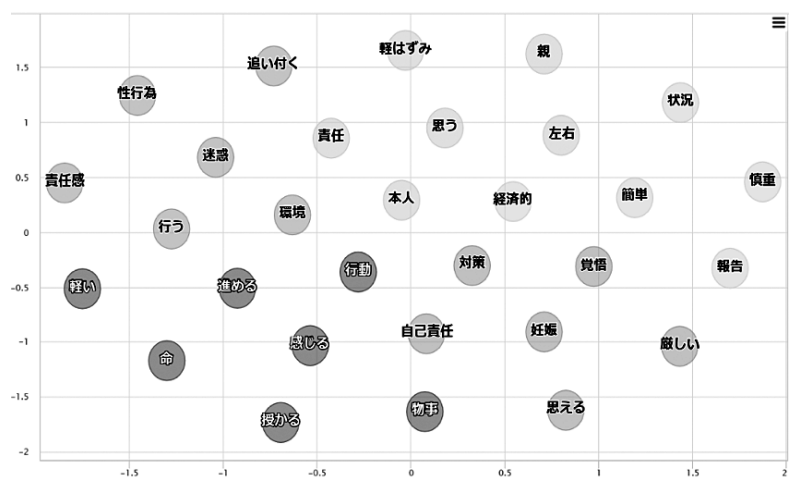


図6 二次元マップ (女)

妊娠・出産・中絶の価値観について

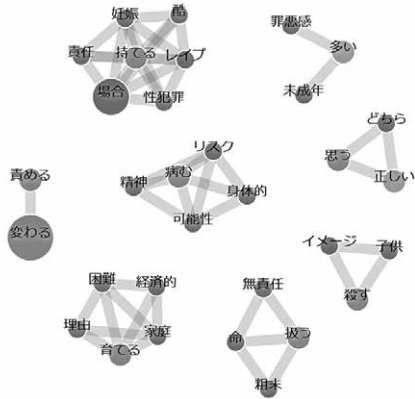


図 11 共起因子 (女)

考 察

本研究では、男性と女性との間に妊娠・出産などの性に関する価値観にどのような違いがあるのか検討した。

1・未成年の妊娠・出産について

まず、「未成年者の妊娠・出産についてどう思うか」の質問に対して男性は、妊娠が発覚したあとの世間の見方や今後の将来、お金に対する言及が中心となっている。「不安の種」や「危機管理」という言葉からも理解できるように、未成年・若年の妊娠を「リスク」ととらえ、適切に管理すべきこととして理解する傾向が高いこと示唆していると言えるだろう。また当事者意識というよりは、社会の目に晒された時の不安や将来への不安や戸惑いが隠れていることが想像される(図1、2)。

一方で女性の場合は、「性行為」そのものに対する否定的な意見が多く見られた。これは、自身の周りで妊娠した人や、きょうだいの面倒を見る機会が多いなど、周囲の妊娠や出産、育児などを身近に経験したことがあることが考えることができる。そのため妊娠や出産した後の女性の体、そして精神的な負担を目にし、将来の自分のこととして意識する傾向が高いと考えられる。また、図4、5で見られるように、「軽はずみ」、「世間体」、「性行為」の三つのスコアが高かった。中でも「軽はずみ」の単語のスコアは2.44と他の単語のス

コアより顕著に高く、女性の場合、未成年が妊娠・出産することが、「安易に性的関係を持つことが、軽率な行動である」という認識をされている可能性が示唆される。そして、上記の三つの単語の周辺に「責任」、「自己責任」、「経済的」、「責任感」、「向き合う」の5つの単語が近くに付随していたことから、金銭面の他に、妊娠して子供が安全に産まれるまでの間、切迫流産などのように、可能性として起こりうる問題があることがわかる。そのためその問題に直面しなければならないことへの覚悟の必要性と責任の大きさを自覚しているのかもしれない。

以上のことから、男性は妊娠が発覚した後の世間の見方や今後の将来、お金といった社会的側面に言及する傾向があるのに対して、女子は、「行為」そのものにする否定的感情を示す傾向が高いことがわかった。女性は、同性と女性特有の問題について話す機会も多く、話の中から自分が持っている情報と相手を持っている情報を交換・共有していることがわかる。話す機会が多ければ「性」について考える機会も多く、より深く理解することで、男性よりも「性」を、将来的に対峙しなければならない問題として見ていると考えられる。

しかしながら男女共に共通することとして、性行為そのものや、妊娠した後のことに言及した単語は多く、図1、および図4を見ると、「及ぶ」の近くでは「若年」「妊娠」「軽はずみ」「不安の種」などの単語が見られ、その配置も中心の近くになっている。このことから未成年者が性行為を行うことは、軽率な行動であると感じていることが理解できる。また、「軽はずみな行動」としての認識に至るには、「性行為」に関する知識や情報が不十分であり、熟慮した上での性行為であるべきという感覚を持っているのかもしれない。性行為の後に、性感染症や望まない妊娠につながる可能性もあるため、自身や子どもに大きな負担になることを意識しやすくなると考えられる。

2・中絶に関して

中絶に関して、男性はその行為が“一種の殺人”といったイメージを想起しやすく、また「中絶は親としての責任の放棄である」という認識を持っている可能性があると考えられた。「粗末」「命

の二つの単語の周囲に「エゴ」や「放棄」、「思い込み」といった単語があることから、中絶は大人の都合であるということが強調されている(図7)。一方で女性は、図9、10をみると、「産む」が1.42とスコアが高く、「中絶」と「出産」という、相反する言葉が意識化されやすい。このことから、胎児の命を絶つということの前に、新しい命が宿っているということへの意識の強さが見て取れる。これは子どもをその身に宿すのが女性であるということによる認識の違いなのかもしれない。また、女性との認識の差が出てしまうことについて男性は、「関係者としての経験」はできるものの、「出産の当事者体験」自体が機能上不可能なこともあり、これらの問題について、実感がわきづらいのかもしれない。女性から見れば切実な問題であっても、男性にとってはどこか軽く捉えてしまう可能性がある。

「中絶」の周辺を見ると「粗末」「殺人」「負担」「責める」と、中絶そのものに対しては否定的だが、一方で女性に特有なこととして、図9、10からも、妊娠に至った経過として、レイプや親や兄弟からの性的虐待など性犯罪被害の可能性についても言及している。

そのため、中絶に関して必ずしも否定的というわけではない。また、中絶を選択した場合、中絶手術を行った後にかかる精神的・身体的負担などについて意識されていることも読み取れる。これらの指摘は昨今、家庭での性的虐待や教員による生徒への暴力などが社会問題となっており、メディアで頻繁に取り上げられている影響もあるかもしれない。よって性犯罪に関する情報に触れる機会も多く、自分の身近な問題として捉えやすいのではないかと考えられた。

3・まとめ

本研究では、17歳から27歳までの高校生から大学生および成人までの男女に対して、未成年の妊娠・出産・中絶についての認識について調査を行った。未成年における妊娠・出産・中絶についてのイメージは、命を粗末にすること、および新たな命を奪ってしまうことへの責任の乏しさ、そして精神的な負担に関することが中心であり、否定的な意見が多いと考えられた。妊娠が発覚した

ときや出産・中絶を選択した時の経済的負担、周囲からのプレッシャーや身体的負担や心理的負担のリスクの他にも、未成年の妊娠は、世間からの否定的な評価を受けるのではないかといった考えを持っている。まさに社会的葛藤が強い問題であるということが理解できた。しかしながら、犯罪などに巻き込まれた結果としての妊娠・出産の場合に関してはそれほど強い否定感情はなく、むしろ、被害を受けたこと、またその後の中絶や出産などに対する精神的・身体的負担への配慮などが見て取れた。この感覚は特に女性に強く見られるものであった。この点に関しては、男女による意識の違いが明確化したと言えるだろう。

また一方で未成年者が望まない妊娠をしないためには、正しい「性」の知識を身につけることも重要と考えられた。正しい知識を得るためには、ネットや本などから収集できる情報も必要である。だが、学校において、現在の性教育より深い内容の「性」を扱った教育を行うことや、パートナーや親、友達との会話の中から意見交換し、自分なりの考えを醸造することも重要と思われた。

しかし、「性」に対してオープンに語られようとする際に、「性」について興味、関心を持つことが、「恥ずかしいこと」として捉えられ、周囲からも揶揄される時もあるかもしれない。ただ、正しい知識を獲得することで、エイズやHIVなどの性感染症の予防や、性犯罪の危険意識を持つことができ、自分の身を守るための武器になる。そのためにも、まずは小さなことからでも周囲と、「性」について語る機会を持つことが必要と考えられる。

文 献

- 安達 知子 (2019). 性教育の新たなスタートに向けて—行政、教育現場とともに歩む—「性教育と現状と問題点」. 記者懇談会日本記者クラブ.
- Elizabeth Cauffman, . Jennifer Woolard, . Marie Banich, . Sandra Graham. (2009). Minors' Access to Abortion, the Juvenile Death Penalty, and the Alleged American Psychological Association 0003-066X/09/\$12.00

妊娠・出産・中絶の価値観について

- 64 (7), 583-594.
- Harriet F.Pilpel, . Ruth J.Zuckerman. (1972).
Abortion and the Right of Minors Case
Western Reserve Law Review 23, 50-58.
- 小山田 明代 (2020). ひよこクラブ. 株式会社ベ
ネッセコーポレーション.
- 石川 哲也・森脇 祐美子 (2011). 諸外国の学校に
おける性教育. 学校保健研究, 52 (6), 416-
421.
- 菊池 美奈子 (2011). 保健室からみた高校生の性
をめぐる状況とそれに対する取組について.
学校保健研究, 52 (6), 427-431.
- 厚生労働省 HP, (2017). 厚生労働省人口動態統計.
([https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/
jinkou/kakuteil7/index.html](https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakuteil7/index.html) 令和 2 年 6 月 1
日取得)
- 厚生労働省 HP, (2017). 厚生労働省衛生行政報告
書例の概況. ([https://www.mhlw.go.jp/toukei/
saikin/hw/eisei_houkoku/18/](https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei_houkoku/18/) 令和 2 年 6 月 1 日
取得)
- 増田 安代・今村 恭子 (2005). 高校生の性教育
に関する課題を探る ―学校と家庭で享受し
た性教育と性への認識調査を通して―, 7(1),
79-88.
- 車谷 晴子 (2020). 朝起きたら妻になっていて妊
娠していた俺のレポート. 講談社.
- 文部省 (1999). 学校における性教育の考え方・
進め方. ぎょうせい.
- 沖田×華 (2016). 透明なゆりかご. 講談社.
- 斎藤 益子 (2018). わが国の性教育の現状と課題.
日本性教育協会, 87, 1-8.
- 鈴ノユウ (2012). コウノトリ. 講談社.
- タイム涼介 (2016). セブンティーンウイザン. 新
潮社.
- 柏原 杏子 (2020). たまごクラブ. 株式会社ベネッ
セコーポレーション
- 山本 美江子・劔 陽子・大河内 二郎・松田 晋哉 (2002).
アメリカ合衆国における人口妊娠中絶と 10 代
の望まない妊娠対策. 日本公衛誌, 49 (10),
1117-1127.
- コロナ休校で懸念 相談が過去最多 [https://www.
asahi.com/articles/ASN5D4J68N5DTLVB006.html](https://www.asahi.com/articles/ASN5D4J68N5DTLVB006.html)
(2020 年 8 月 31 日取得)
- ・高崎 順子, (2019). なぜ日本の性教育は“セッ
クス中心”なのか <https://president.jp/-/29113>
(2020 年 8 月 31 日取得)
- ・ユーザーローカル社 AI テキストマイニング
<https://textmining.userlocal.jp/> (2020 年 11 月
30 日取得)

参考資料

- ・朝日新聞デジタル, (2020). 中高生の望まぬ妊娠,